日本独文学会
2013 年度春季研究発表会

JGG-Frühlingstagung 2013

研 究 発 表 要 旨

Abstracts

2013 年 5 月 25 日（土）・26 日（日）

am Sa., 25. und am So., 26. Mai 2013

第 **1** 日　午前 **10** 時より

第 **2** 日　午前 **10** 時より

1. Tag: ab 10 Uhr

2. Tag: ab 10 Uhr

東京外国語大学（府中キャンパス）

Fremdsprachen-Universität Tokyo (Fuchu-Campus)

目次

第 1 日　5 月 25 日（土）

シンポジウムⅠ（14:30～17:30）　A 会場（115 教室）……1

変容する「ヴァレンツ」 ― 文法論と辞書論の接点を求めて
„Valenz“ in der Metamorphose: auf der Suche nach einer Schnittstelle zwischen Grammatik und Lexikon

司会：藤縄 康弘，清野 智昭 / コメンテーター：清野 智昭

1. 反使役動詞の語彙的意味における使役性の考察　青木 葉子
2. 移動動詞におけるヴァレンツの増減　髙橋 美穂
3. 反使役としての bekommen + 過去分詞　藤縄 康弘
4. 日本語動詞における語彙的意味と形態のミスマッチ
―「試合に出る」「シュートを外す」を例に ―　今泉 志奈子

シンポジウムⅡ（14:30～17:30）　B 会場(227 教室)……5

コーパス利用に基づくドイツ語研究 ― 幅広いデータ収集と頻度から見直す ―
Korpusbasierte Erforschung der deutschen Sprache.
― Überlegungen auf der Basis umfangreicher Datensammlung und Häufigkeit ―

司会：恒川 元行

1. 形態と頻度 ― コーパスから見た 2 格語尾の使い分け ―　今道 晴彦
2. 辞書記述と頻度　黒田 廉
3. 語結合分析と頻度 ― 使役起動交替を例に ―　カン ミンギョン
4. 基本語彙と頻度 ― 実践と課題 ―　大薗 正彦
5. 書くためのパラレルコーパス構築と頻度　阿部 一哉

口頭発表：ドイツ語教育（14:30～16:25） C 会場（226 教室）……9

司会：正木 晶子，Vincenzo Spagnolo

1. Was lernen Lernende vom Lehrerfeedback? ― Empirische Untersuchung zur Wirkung verschiedener Korrekturverfahren auf die formale Korrektheit von Lernertexten　Tatsuya Ohta
2. Plädoyer (und Projektvorstellung) für freie, multimediale DaF-Lehrwerke: *Adaptable Open Textbook*　Sven Körber-Abe
3. 出会いと対話の場としてのドイツ語教育 ― 試行錯誤と失敗体験を阻害しないために　濱野 英巳

口頭発表：文学 1（14:30～17:45） D 会場（108 教室）……11

司会：赤司 英一郎，明星 聖子

1. ウーヴェ・ヨーンゾン『ヤーコプについての推測』における内的モノローグのダイアローグ性　金 志成
2. ゲーテ『ファウスト第 2 部』の「ファウストのテルツィーネ詩行による独白」を読む ― スイス体験と詩作 ―　土谷 真理子
3. 歴史は小説になることなく文学的たりうるか ― 18 世紀小説理論の観点からみたシラーの「歴史」と「物語」―　北原 寛子
4. 境界と陶酔 ― 美と政治の狭間に立つエルンスト・ユンガー ―　長谷川 晴生
5. マックス・ヴェーバー「音楽社会学」からトーマス・マン『ファウストゥス博士』へ　山室 信高

口頭発表：文学 2（14:30～17:05） E 会場（107 教室）……15

司会：宮田 眞治，Stefan Keppler-Tasaki

1. アンデルセン『人魚姫』における脚部障碍の表象 ― フケー『ウンディーネ』との比較　中丸 禎子
2. デープリンと死者の国 ―『マナス』について　時田 郁子

3. Erstarren der Vergangenheit und die Zukunft im Modus des Möglichen: Zeitlichkeit der DDR-Erinnerung bei Angela Krauß und Julia Schoch Asako Miyazaki

4. Kurdische Exilliteratur im deutschsprachigen Kontext Theresa Specht

ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査報告 ― 教育機関を対象とする アンケート結果から ―（16:00～17:30） F会場（114教室）……18
ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査委員会：太田 達也，高岡 佑介，生駒 美喜，神谷 善弘，柴田 育子，Michael Schart，藤原 三枝子，星井 牧子，Marco Raindl，藁谷 郁美

ポスター発表（13:00～14:30） G会場（113教室）……19
（ポスター発表は同時進行です。）

- Ein inhaltsorientierter Unterricht als Vorbereitung auf einen Studienaufenthalt in Deutschland Martina Gunske von Kölln
- „Echte“ und „falsche“ Regionalkrimis ― Beispiele aus dem Ruhrgebiet Oliver Mayer
- ドイツ語話速の機能と習得に関する考察 村田 優子
- 日本人ドイツ語学習者のドイツ語音声における母音/i//u//y/の無声化 ― 生成面からの観察 ― 安田 麗
- 役人フランツ・カフカと事故ネットワーク 横山 直生

ブース発表1（14:00～15:30） H会場（106教室）……22

- Lesekompetenz und Lesekonzepte ―Ein Vergleich zwischen Leseverhalten und Lesestrategien bei japanischen Deutschlernenden
Yoshiko Nishide, Yutaka Takatsugi, Shinichi Sakamoto, Yoshinao Furukawa, Serina Kashiwagi

ブース発表2（16:00～17:30） H会場（106教室）……23

- カフカ文学における異文化性とユダヤ性 林嵜 伸二

第 2 日　5 月 26 日（日）

シンポジウムⅢ（10:00～13:00） A 会場（115 教室）……24

生涯教育としてのドイツ語教育を考える
— 高校，大学，卒業後を見据えたドイツ語教育へ向けて —
Deutschlernen im lebenslangen Prozess
— auf der Oberschule, an der Universität und nach der Universität —

司会：神谷 善弘，生駒 美喜

1. 生涯学習としてのドイツ語学習
— CEFR を参考にした制度設計に向けて — 境 一三
2. フランス語教育の高大接続・連携 山崎 吉朗
3. 中国語教育の高大接続・連携 藤井 達也
4. ドイツ語教育の高大接続・連携 吉村 創
5. 大学外・卒業後を視野に入れたドイツ語学習 清野 智昭

シンポジウムⅣ（10:00～13:00） B 会場（227 教室）……28

ドイツ語研究に今日的自律性はあるのか — 方法（論）をめぐる考察
Wohin mit der Autonomie der Deutschforschung?
— Methodisch-methodologische Überlegungen

司会：小川 暁夫 / コメンテーター：高橋 輝暁

1. 言語哲学とメディア言語学 —ドイツ語研究のための新たなリンク
渡辺 学
2. ドイツ語「記述」文法の転回 — 類型論の観点から 小川 暁夫
3. ドイツ意味理論と認知言語学の出会い
—「エネルゲイア」としての文法研究 宮下 博幸
4. 行為，言語，可視化 —『ザクセン法鑑』の挿絵から 井出 万秀

口頭発表：語学（10:00～12:35） C 会場（226 教室）……32

司会：黒田 廉，時田 伊津子

1. Koordination und Integration suprasegmentaler Merkmale im Japanischen bei deutschen Muttersprachlern　Yuki Asano

2. 前置詞融合形に関する考察 ― ドイツ・ルール地方の地域語を例に ―　上村 昂史

3. ドイツ語辞典における「定義語彙」調査　山田 善久，在間 進

4. 日独比較マルチモーダル分析 ― 説明場面に見られる問題提示の手続き ―　白井 宏美

口頭発表：文化・社会（10:00～11:55） D 会場（108 教室）……35

司会：大宮 勘一郎，古澤 ゆう子

1. 「書籍学講座」における研究と教育 ― マインツ大学の事例を中心に ―　竹岡 健一

2. 仮面と身体表象 ― 表現舞踊における仮面の解釈をめぐって ―　照井 夕可里

3. イタリアとドイツの幸せな結婚？ ― 『マーサの幸せレシピ』をめぐって ―　木本 伸

口頭発表：文学 3（10:00～12:35） E 会場（107 教室）……37

司会：寺尾 格，石田 雄一

1. 英雄譚における虚言の肯定性 ― ジーフリトとトリスタンの比較を通じて ―　田中 一嘉

2. 『エネアス物語』から『トリスタン』へ ― ミンネの可触性の問題について ―　渡邊 徳明

3. ノイバー座の演劇改革とザクセン喜劇の受容をめぐって　小林 英起子

4. G. ハウプトマンを巡るブラームとラインハルトの相克　鈴木 将史

ブース発表 3（11:30～13:00） H 会場（106 教室）……40

- 携帯端末連携型教科書の作成と授業における運用について
川村 和宏，松崎 裕人，竹内 拓史
熊谷 哲哉，押領司 史生

シンポジウム I
変容する「ヴァレンツ」— 文法論と辞書論の接点を求めて

司会：藤縄 康弘／清野 智昭（コメンテーター）

「ヴァレンツ」は今日，文法を記述する概念としては疑問符付きのものであるかもしれない。Jacobs (1994) が指摘するとおり，この用語は何か根源的な言語実体を指すというよりも，統語論・形態論・意味論などの異なる次元にある複数の現象を，特にそのようなものとは意識せぬまま一括した名称であることは否めない。とはいえ，文法研究において，そのような，本質を特定し切れないまま使われている用語は少なくない。「語」や「文」，「主語」などいずれも，いくら定義をしたところで必ず漏れが生じる。にもかかわらず，これらの用語を用いずに文法を記述することは事実上，不可能である。

「ヴァレンツ」もまた同様で，上述のような多次元性を踏まえた上であれば，むしろ現象を包括的・横断的に捉えるのに好都合である。このような「ヴァレンツ」観に立ち，本シンポジウムでは，さまざまな文型の交替現象を取り上げる。具体的には，状態変化動詞・移動動詞における自他の交替や統語的使役文の振舞い，いわゆる「自由与格」の分布，bekommen + 過去分詞構文の可能性と解釈などである。これらは，①それぞれに「状態変化」「移動」「授受」など，特有の意味関係，すなわち個々の述語動詞の語義に由来するヴァレンツが想定される，②しかし，そのような内在的ヴァレンツは文のレベルで増減し得る，③しかも，助動詞や再帰代名詞の有無等に応じ，ヴァレンツの形態・統語論的な質も変異するという 3 点において，上述「ヴァレンツ」の性格を如実に示す現象である。

発表者のうち最初の 3 名，青木・髙橋・藤縄は，こうしたドイツ語の種々の文型交替について，とりわけ語彙内在的－形態・統語論的ヴァレンツ間の相反（反使役に残る使役主，非使役的な使役，非受動的な受動）に着目しながら独自の分析を示す。また，最後に発表する今泉は，ドイツ語の状況と対照すべく日本語における自他交替を扱うが，ここでも「反使役的な他動詞文，使役的な自動詞文」といったミスマッチが話題の中心となる。

本シンポジウムは，意味構造を基盤として文法を捉えるという点で，2009 年秋季研究発表会で行ったシンポジウム「『文意味構造』の新展開」の続編となる。発表者は学会誌 141 号の特集や各種研究会などの場を通じ，直接・間接に交流をはかり，互いに関心を共有してきた者である。「ヴァレンツ」というポピュラーな話題を扱いながらも，いっそう的を絞ったかたちで問題を提起することになるだろう。また，単にドイツ語内部における現象の多様性・多層性に目を向けるだけでなく，ドイツ語の外に繋がる通言語性を追求するというスタンスも変わりない。このように交差する複数の視点を通じ「ヴァレンツ」を包括的・横断的に議論する場を提供したいと考えている。また今回は，コメンテーター兼司会者とし

て，数多くのドイツ語教材を手がけている清野が加わる。これにより，もともと外国語教育への応用という点でも注目されていた「ヴァレンツ」の今日的意味合いを問い直すことも意図している。

1. 反使役動詞の語彙的意味における使役性の考察

青木 葉子

ドイツ語の状態変化を表す反使役動詞には, Die Vase zerbrach のような自動詞の形態を取るものと，Die Tür öffnete sich のような再帰動詞の形態を取るものがある。これらはいずれも対応する他動詞表現を持つ交替動詞である。先行研究においては，この 2 種類の反使役動詞の間に意味的な違いが認められるか否かが議論されており，その際に自由与格の解釈がしばしば取り上げられてきた。例えば Schäfer (2008) は，Dem Hans zerbrach die Vase のような自動詞では，与格に使役主の解釈（花瓶が割れるという事態をハンスが意図せずに引き起こした）を与えることが可能であるのに対し，Der Maria öffnete sich die Tür のような再帰動詞では，同様の解釈が排除されると述べている。この解釈の違いに基づき，反使役の自動詞と再帰動詞の間に使役性という観点で差があるとする説と，それを否定する説の両方が，これまでの主要な研究において提案されてきた。

本発表では，以上の議論を踏まえながら，実例の分析を行う。そして，反使役動詞において自由与格の使役主解釈が容認されるのは，動詞がその語彙的意味として，不可逆的な状態変化を表す場合であると論じる。さらに，上記の 2 種類の反使役動詞は，使役構造を基盤とし，そこから異なる操作によって派生されるという分析を示す。このような分析を通じ,「使役性」というどこか捉え難い概念にアプローチし，反使役の意味を捉え直すことが，本発表の目標である。

2. 移動動詞におけるヴァレンツの増減

髙橋 美穂

移動動詞で自他交替が認められるものはごく一部（例えば fahren など）に限られ，多くのもの（例えば fallen，gleiten，rutschen など）では，lassen による統語的使役が用いられる。この lassen 使役構文はコンテクスト次第で，主語の意図的な行為を表すこともあれば，主語の意図せぬ事態を表すこともある（例えば Ich ließ die Flasche zu Boden fallen.で「落とした」と「落としてしまった」)。後者の解釈における主語は，そのような事態を防ぐことができなかったという意味で非動作主的であり，このタイプの使役構文は意味的にはいわゆる自由与格を伴う自動詞文（例えば Mir ist die Flasche zu Boden gefallen.）に近いと考えられる。本発表では，lassen 使役構文と与格を伴う自動詞文とが対をなす移動動詞を主な対象とし，項の増減に関わって観察される構文交替の意味的な特徴を示す。とくにこのタイプの構文交替は，状態変化動詞で一般に想定されるような「反使役」とは異なる意味関係，ここでは Wunderlich (2000) が提案する「所有関係」に基づくものであ

ることを，大規模コーパスからの実例によって示す。さらに，この所有関係という意味的特徴が，従来は使役の構造に基づくとされる交替現象を捉え直す可能性があることを論じる。

3. 反使役としての bekommen + 過去分詞

藤縄 康弘

Er bekam den Apfel gewaschen のような bekommen + 過去分詞の表現は，Reis (1985) や Wegener (1985)，Leirbukt (1997) など，主要な先行研究において「与格受動」ないし「もらい手受動」（彼はりんごを洗ってもらった）と位置づけられている。この見解は「受動」読みの bekommen + 過去分詞が「可能」読み（彼はりんごを洗えた）のそれとは異なる構文であるとの前提の上に成り立っており，これを是とする根拠も，おもに Reis (1985) によって示されている。これに対し，Haider (2010) や Oya (2010) のように, 2 つの読みがひとつの統語構造に基づいているという見解もある。

本発表では，実例の分析やインフォーマント調査をもとに，

- 統語的に 2 種類の bekommen + 過去分詞（「受動」を表す構文と「可能」を表す構文）が存在するのではないこと
- このような構文としての bekommen + 過去分詞は一種の反使役構文であること

を明らかにする。これは，先行研究の対立軸（bekommen + 過去分詞が受動態であるのか否か）を相対化するとともに，文法的表現の多義性がどのように発現するのかを問い直すことを意味する。その際，ここでも「所有関係」の位置づけが重要な鍵を握ることになる。

4. 日本語動詞における語彙的意味と形態のミスマッチ
—「試合に出る」「シュートを外す」を例に —

今泉 志奈子

Burzio (1986) の一般化は日本語でも概ね成り立つものの，実際には，例外が多数存在する。今泉・郡司 (2002)は，他動詞「出す」と自動詞「出る」を例に，潜在的な使役構造に反使役化を仮定する分析だけでは扱いきれないような自他交替現象を指摘し, 動詞の語彙的意味と形態とのミスマッチを包括的にとらえるべく, 動作主の意図性の有無を軸とする動詞の下位分類を提示することで, 使役・再帰・受動という連続的な態交替現象のなかに位置づけようとした試みである。

本発表では，今泉・郡司 (2002)が課題として残した現象を扱う。まず,「日本人選手の多くが海外に出て活躍している」の「出る」の場合，主語が自らの意志で海外に出るという解釈が想定されるのに対し,「香川がついにプレミアリーグの試合に出た」の自動詞「出る」は，香川ではなく監督が出場の可否を決めるとい

う点で純粋な自動詞とは言えない面がある。一方,「香川がシュートを外した」の他動詞「外す」は，香川がシュートを打つ主体であるものの，シュートの成否については制御能力を持たないという点で純粋な他動詞とは異なった意味合いを帯びる。本発表では，日本語動詞の語彙的意味と形態的ヴァレンツとの間に見られる特徴的なミスマッチ現象を指摘し，こうした日本語動詞のふるまいに統一的な分析を与えようとする際にも，ドイツ語の自由与格に関連して導入された「イベントの所有」の概念が重要な役割を果たすことを明らかにしていきたい。

参考文献 http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/fujinawa/ms/jgg_symposium2013abs.pdf

シンポジウムⅡ
コーパス利用に基づくドイツ語研究 ― 幅広いデータ収集と頻度から見直す ―

司会：恒川 元行

1990 年代前半，コンピュータが急速に普及し，ドイツ語研究にコーパスを利用する可能性が見えてきた。当時はしかし，実際に利用できるコーパスとしては Mannheimer Korpus I しかなく，アクセスも容易ではなかった。その後，現在までの約 20 年間に，ドイツ語研究環境は大きく変化した。大規模コーパス DeReKo（IDS）や DWDS（BBAW）が整備され，FU Berlin でも新たに COW が開発されつつある。他方，ドイツ語に特化した研究支援ソフト（岐阜経済大学山田研究室の Tecely など）の開発が進み，検索･分析能力や利便性も格段に改善されつつある。すなわち，ドイツ語の分野でも，現在，データを幅広く大量に収集し，頻度も含めた分析を行うことのできる環境整備が進んだ。

コーパス利用の有用性は一般的に，幅広い大量のデータへのアクセス，幅広い大量のデータによる仮説の検証，頻度データの入手・分析などが考えられる。しかし，このような直接的な効用だけではなく，ドイツ語を母語としない私たちにとっては，コーパス利用には語感の欠如を克服するという可能性が秘められている。これは，以前であればドイツ語母語話者に多かれ少なかれ依存せざるを得なかった私たちのドイツ語研究が，コーパスの利用によって自立的なものになりうる可能性，ドイツ語母語話者に勝るとも劣らないドイツ語研究を行う可能性を手に入れた，ということでもある。

他方，コーパスに関わる「均衡性」「代表性」の問題は，基本的な課題として 20 年前も今も変わらず残されている。しかし，理想の「均衡性」「代表性」が実現されていないからと言って，コーパスを否定することにはならない。ドイツ語研究が一定の目的を持って行なわれる以上，その目的の追求に現時点最善の方策を講じることが責務であり，この点でコーパスの利用には否定しえない有用性が認められる。

以上の認識に基づき，本シンポジウムでは，形態（今道），辞書（黒田），統語と意味（カン），語彙（大薗），応用（阿部）の観点から 5 つの研究発表を行う。これらの研究は，いずれも頻度データを踏まえながらドイツ語の使用実態を明らかにし，それを記述（あるいは応用）しようとする試みである。ドイツ語の使用実態の解明と記述は大きな研究課題であり，継続した取り組みが必要である。それだけでなく，あわせて，コーパスの選択，データの取り出し方や二次的な処理の仕方，頻度データの評価や利用など，方法論上での試行錯誤や経験の蓄積も，今後の研究の重要な課題として位置付けられる。今回の発表は，そのような意味で，よりよいコーパス利用研究への試行の報告でもある。

1. 形態と頻度 ― コーパスから見た 2 格語尾の使い分け ―

今道 晴彦

ドイツ語の語形変化には，複数の形式を容認するものがある。たとえば，-eln，-ern で終わる動詞の一人称現在形（例：samm[e]le），-en，-er で終わる形容詞の比較変化（例：teu[e]rer），男性・中性強変化名詞の単数 2 格（例：Metall[e]s）などである。従来は，母語話者の内省，経験を頼りにこうした形態現象の使い分けがなされてきた。しかし，近年は，非母語話者であっても，大規模の言語データを駆使して母語話者の使用傾向を観察し，従来の文法記述を批判的に見直すことが可能になりつつある。

本発表では，このような例のうち，辞書間でも食い違いが認められる 2 格語尾が，どのように使い分けられているのかを数量的に検証し，実用的示唆を得ることを目指す。具体的には，(1) Duden Grammatik の選択規則はどの程度頻度データと一致するのか，(2) 当該規則にも関連する音節数，アクセント，外来語のうち，どの要因が 2 格語尾の使い分けに決定的かを分析する。その結果，Duden Grammatik の選択規則は必ずしも頻度データと一致しておらず，3 要因のうち音節数が 2 格語尾の使い分けに最も影響していることなどが判明している。

2 格語尾（-s か-es か）は通時的に変動を繰り返しており（Paul，1959），選択規則と頻度データの不一致は，この過程にある事例が多数存在するためとも推察できる。今後，2 格語尾の記述のあり方を探る上で，時系列変化の検証が必要になることも，実例で示したい。

2. 辞書記述と頻度

黒田 廉

辞書の記述内容の妥当性についてはこれまでも一定の調査は行われてきたし，個人的経験にもとづいた指摘に至っては枚挙に暇がないであろう。辞書はテキストを読んだり，文章を書いたりするために用いられる実用のための道具である。しかし，たとえば，実際のテキストを材料に，有用性という観点から記述内容を客観的方法で検証するという作業はあまり行われてはいない。

本発表では，Spiegel Online の記事を読むというケースを想定し，辞書がそれにどの程度対応できるかを，主として収録語の点から検討する。より具体的には，まず現在作成中の Spiegel Online の記事を収集したコーパス（仮称「Spiegel コーパス」）に現れる語が, Duden. Deutsches Universalwörterbuch. 7. Aufl. Mannheim. 2011 に収録されているか否かをチェックする。これにより，コーパスに出現する語の Duden でのカバー率を調べるとともに，Duden 未収録の語について，その特徴も明らかにする。次に，未収録語の頻度を，Institut für Deutsche Sprache の DeReWo のような，より大規模なコーパスに基づいた頻度リスト等でも調査を行う。

以上により，現時点における辞書の限界の一端を明らかにするとともに，コーパスを利用した辞書改善の可能性の一つを示す。

3. 語結合分析と頻度 ― 使役起動交替を例に ―

カン ミンギョン

本発表では，従来の「one form – one meaning principle（Bolinger 1977 など）」に対し，使用頻度を手がかりに，形式と意味の対応関係を言語使用における「傾向」として捉える可能性を探る。

具体的には，(1) 語彙的使役動詞の使役起動交替（*öffnen – sich öffnen*），(2) 非使役的用法のみの動詞（*platzen*）とその統語的使役表現としての *lassen* 構文（*platzen lassen*）および機能動詞結合（*zum Platzen bringen*）を取り上げる。その際，それぞれの形式（構文）の中で用いられる具体的な語彙も含めて語結合の頻度分析を行い，項に現れる名詞によって，構文の使用頻度・用いられ方に違いが見られることを示す。

たとえば，(1) の場合，名詞 *Tür* との結びつきでは典型的な交替 *Er öffnet die Tür. – Die Tür öffnet sich.* が見られるのに対し，*Tresor* や *Blüte* との結びつきでは（理論上はともかく）データの中に実際の交替例を認めにくい。また (2) の場合，*Luftballon* や *Reifen* のような具体物についての使役表現としては *zum Platzen bringen* が高頻度で用いられるのに対し，*Termin* や *Gespräch* などの抽象名詞と結びついたメタファー的用法の使役表現としては *platzen lassen* の使用が優勢である。ある 1 つの名詞（事柄）に関して両形式が使用される場合，その使い分けが問題になるが，コーパスの事例を見る限り，両形式が必ずしも明確な意味的相違に基づいて使い分けられているとは言い難い。したがって，語結合や頻度を手がかりに，使用上の「傾向」として，両者の使い分けを捉える必要があると考えられる。

4. 基本語彙と頻度 ― 実践と課題 ―

大薗 正彦

本発表では，日本におけるドイツ語学習またはドイツ語教育・研究において参照できるような，頻度に基づくドイツ語基本語彙リスト（5000 語）の作成について報告する。

基本語彙の選定についてはこれまで様々な提案や批判がなされており，日本独文学会でも，「基礎語彙策定の試み」（1993 年春），「ドイツ語基本語彙」（2011 年秋）などのシンポジウムが企画されてきた。それにもかかわらず，広く一般の使用に供されており，一般の学習者・教師が気軽に，かつ簡単に，参照できるような基本語彙リストは今なお存在しないのではないか。

現在では，各種コーパスに基づいた複数の語彙リストが参照可能な状況にある（例えば DeReWo，deWaC，Jones/Tschirner，Deutscher Wortschatz など）。それらを用いれば，自らコーパスを構築することなく，高い頻度を示し，幅広い使用域に出現する語彙を取り出すことが，個人のレベルでも可能である。本発表ではまず，その実践例を示す。その後，そのようにして出来上がった基本語彙リストについて，その有用性や課題について検討する。

基本語彙の選定は，形態・統語分析や辞書記述など，他の領域の基盤となる作業である。一方で，基本語彙という観点から，いわゆる学習文法や，さらには広く言語現象一般を捉え直す可能性も提供できるものと期待される。

5. 書くためのパラレルコーパス構築と頻度

阿部　一哉

ドイツ語を書くことは，私たち日本人が特に不得手とするところである。このような困難を克服する方法として，阿部・在間(2013)は，オンライン利用可能な日独対訳句例集「句例パラレルコーパス」を提案した。

本発表では，「句例パラレルコーパス」に関して，(1)頻度に基づく句例データ収集と，(2)句例を使いやすい形で提供する手法について報告する。

まず，句例データ収集に関して，DWDS を利用した手法について報告する。DWDS の機能のひとつである Wortprofil を利用すると，例えば「動詞と目的語」のような 形態統語的情報を含めた形で,語のコンビネーションを抽出することができる。

次に，利用者への句例提供方法について，サンプルデータに基づく操作デモンストレーションを行う。その際，句例の検索方法と，検索結果の提示方法の，ふたつに焦点を絞って報告を行う。

ドイツ語を書くというニーズに答えるためには，ドイツ語がどのように使われているのかが明らかにされねばならない。本発表は，使用頻度分析によりドイツ語の具体的な使用実態が捉えられるようになったことで，このようなニーズに応えることが可能になったことを主張するものである。

〈参考文献〉阿部一哉・在間進(2013)：「句例パラレルコーパスの構築と諸問題」跡見学園女子大学文学部紀要　第 48 号（印刷中）

口頭発表:ドイツ語教育

司会：正木 晶子，Vincenzo Spagnolo

1. Was lernen Lernende vom Lehrerfeedback? – Empirische Untersuchung zur Wirkung verschiedener Korrekturverfahren auf die formale Korrektheit von Lernertexten

Tatsuya Ohta

Zur Wirkung der formalen Fehlerkorrektur zu Lernertexten gibt es seit den 90er Jahren eine Debatte, die bis heute noch nicht entschieden ist. Im Vortrag wird auf diese Diskussion eingegangen und ein Teil der Ergebnisse einer vom Referenten durchgeführten empirischen Untersuchung vorgestellt.

Versuchspersonen waren 89 japanische Studierende. 51 von ihnen lernten auf Grund-, 38 auf Mittelstufen-Niveau Deutsch. Die Probanden wurden jeweils in drei Gruppen geteilt. 6 Mal wurden ihnen Schreibaufgaben gestellt, die sie allein und ohne Hilfsmittel in 15 Minuten erledigen sollten. Die Lernertexte wurde jeweils korrigiert – in jeder Gruppe nach einem anderen Verfahren – und versehen mit dem Lehrerfeedback zurückgegeben. Im Anschluss sollten die Lernenden ihren Text anhand des Lehrerfeedbacks noch einmal bearbeiten und erneut abgeben. Alle formalen Fehler wurden bei Gruppe A direkt korrigiert, bei Gruppe B unterstrichen und mit Fehlercodes versehen und bei Gruppe C nur unterstrichen. Der Referent hat die Fehlerquote aller ursprünglichen Texte, die Wörterzahl aller ursprünglichen Texte und die Erfolgsquote der Selbstreparaturen in allen bearbeiteten Texten je nach Gruppe statistisch gemessen und verglichen. Bei der Analyse der erhobenen Daten wurden für die drei Korrekturtypen nur unerhebliche Unterschiede festgestellt, sowohl bei Lernenden auf Grundstufen- als auch auf Mittelstufen-Niveau. Bei der Fehlerquote und der Erfolgsquote der Selbstreparaturen wurden teilweise jedoch auch große Unterschiede zwischen den Fehlertypen festgestellt, über die im Vortrag ebenso berichtet werden soll.

2. Plädoyer (und Projektvorstellung) für freie, multimediale DaF-Lehrwerke: *Adaptable Open Textbook*

Sven Körber-Abe

Die technischen, multimedialen Errungenschaften der letzten Jahre bieten eigentlich hervorragende Möglichkeiten für Lehrer, ihre Unterrichtsmaterialien ohne großen Aufwand zu verändern und an ihre jeweiligen Bedürfnisse anzupassen. Leider werden diese bereits vorhandenen technischen Möglichkeiten durch die meisten Verlage mit unflexiblen Lizenzen und anderen restriktiven Maßnahmen stark eingeschränkt.

In diesem Vortrag sollen zunächst Beispiele derartiger Lehrmaterialien der letzten Jahre gezeigt werden – dem gegenüber aber auch Beispiele verschiedener Bereiche, die trotz,

bzw. aufgrund ihrer Offenheit und freien Verfügbarkeit (auch kommerzielle) Erfolge verbuchen konnten, sowie mehrere internationale Universitäts-Projekte wie z.B. die *OpenCourseWare* des *MIT*, die bereits seit mehreren Jahren derartige Lehrmaterialien anwenden.

Und um es letztlich nicht bei einer bloßen Aufzählung von Beispielen und theoretischen Überlegungen zu belassen, wird im Anschluss daran ein neues Projekt vorgestellt, in dem versucht wird, die theoretischen und technischen Möglichkeiten freier und offener Lehrmaterialien in der Praxis des Deutschunterrichts an japanischen Universitäten anzuwenden.

3. 出会いと対話の場としてのドイツ語教育 ― 試行錯誤と失敗体験を阻害しないために

濱野 英巳

多元的社会の到来を前にして「コミュニケーション教育」の重要性が叫ばれるようになって久しい。とりわけ言語能力を越えた異文化能力には多くの関心が集まっており，ドイツ語教育においても CEFR 準拠と銘打った教材の登場など，「機能的な知識の獲得」から「意味の相互理解・伝達」へとその目的はシフトしつつあるように見える。その一方で，CEFR や DeSeCo の能力記述は，新たな機能的な分類を生み，ハイパー・メリトクラシーとも言われる社会への移行を加速しているようにも思える。本発表では，ドイツ語学習者の学習プロセスに対する調査研究から得られた，日本人外国語学習者特有のセルフ・ハンディキャッピングについて報告を行う。それは日常生活の中に異質なものとの「出会い」と「対話」が埋め込まれていない，日本という国特有のコンテクストに由来するものであると考えられる。学習者を「正しく教え」，「正解に導く」のではなく，学習者自身が異質なものとの「出会い」と「対話」を通じて，「試行錯誤」と「失敗体験」を繰り返し，自らの学びを解放すること。外国語教育を「不確定性」の中で捉え直した時，現代社会において求められるドイツ語教育の新たな役割が見えてくるのではないだろうか。

口頭発表:文学 1

司会：赤司 英一郎，明星 聖子

1. ウーヴェ・ヨーンゾン『ヤーコプについての推測』における内的モノローグのダイアローグ性

金 志成

ウーヴェ・ヨーンゾンのデビュー作である長篇小説『ヤーコプについての推測 Mutmassungen über Jakob』(1959)では，直接的にはフォークナーの影響を受けた物語手法である内的モノローグが用いられており，それはそのつど登場人物のうち特定の一人の声によって担われるが，他者の認識，政治的状況の介入，恋愛，言語懐疑などの契機によって 一つの声(モノローグ) を保てなくなり，ダイアローグ化することがある。本小説のダイアローグ性については，D.G.ボンドによるミハイル・バフチンの文学理論を援用した先行研究がすでに指摘しているが，(1)内的モノローグは分析の対象となっていないという点 (2)そうした多声化が発生する契機については触れられていないという点で依然発展の余地あるものであるため，本発表の主な目的ないし意義は，それを担うことにある。ダイアローグ化の具体的な例としては，内的モノローグを行う三人の主要登場人物のなかでもとりわけ自閉的・イデオロギー的・ユートピア的なディスクールに籠城するシュタージ・エージェント「ロールフス氏」のものを敢えて取り上げ，その発話形式の変遷を詳細に分析することで，テクストに刻まれた分裂の痕跡 ― 「声」の特権性によってシニフィアンの物質性を抹消しようとする氏の身振りが空振りする瞬間 ―，およびその物語の筋との関連性を浮き彫りにする。また，以上の分析の成果と「人物 Person」なる言葉で言い表されるヨーンゾン独特の登場人物観の接続を試み，作家の詩学に新たな視座を投げかけることを目指す。

2. ゲーテ『ファウスト第 2 部』の「ファウストのテルツィーネ詩行による独白」を読む ― スイス体験と詩作 ―

土谷 真理子

ゲーテは詩人でありつつ自然研究を好んだが，彼の自然観察は，本分である詩作へと還元されてゆく。例えば『ファウスト第 2 部』第 1 幕における「ファウストのテルツィーネ詩行による独白」(以下，「テルツィーネ」) 部分には，ゲーテのスイス旅行時の自然体験と詳細な観察によって得られた自然観が反映されていると取ることができる。すなわち，想像力の産物ではなく，(詩化することによって普遍化されているとはいえ，)実際にスイスで目にした自然現象に基づいて詩作されていると解釈できるのである。

従来の『ファウスト』研究において「テルツィーネ」部分は，作品の一部としてもっぱら筋が吟味され，自然描写部分は副次的なものと見られるか，象徴的・神学的意味が付与されて解釈される傾向があった。すなわち，ゲーテの実際のスイス体験との関連性に特化して論じた研究は殆どないのである。(そもそも従来のゲーテ研究においては，文化史的アプローチやスイス人ゲルマニストらの仕事を除けば，スイス旅行自体が体系的に扱われることもなく，長いあいだゲーテの自伝的紀行文学研究上の空白となっていた。)

だが，詩人ゲーテの理想的な自然像というべきものが形成される過程で，スイス旅行という実体験が重要な役割を果たした，というのが今回主張するテーゼである。事実，この「テルツィーネ」部分を詳しく見てゆくと，スイスの旅先でしたためた手記や書簡内にある記述と重なる表現が処々に見られるのである。

3.　歴史は小説になることなく文学的たりうるか
　— 18 世紀小説理論の観点からみたシラーの「歴史」と「物語」—

北原 寛子

18 世紀ドイツでは小説理論が発展し，小説が文学ジャンルの一つと認知されるようになった。その過程において，おなじく近代化の途上にあった歴史学から大きな影響を受けている。この歴史学と文学の融合，あるいは混在した状態を体現している人物の一人が，詩人にしてイエナ大学の歴史学教授であったフリードリヒ・シラーである。彼は『オランダ独立史』の前書きで，歴史書と小説の関係についてわずかながらも言及している。そのことばを手がかりに，文学，とりわけ小説が歴史の叙述から受けた理論上の影響について考察を進める。シラーの歴史学的業績は，その発表当初から純粋な歴史学の業績としてよりも，歴史哲学的な成果と受け止められた。これまでの研究において，それは彼の文学的創作の源になった点や，彼が一般に抱いた自由という概念を形成するために寄与した点で評価されてきた。しかし小説理論との関連には目を向けてこられなかった。シラー研究に軸足があるならば，彼が積極的に小説を書こうとしなかったことから，小説理論との関係について論じられなかったことは不思議ではない。しかし小説理論の発展史を検討するにあたって，シラーの歴史に向き合う態度やその記述の文体，そして彼の周辺をはじめとする当時の人々の反応から，歴史と創作の境界領域がどのように考えられ，受け止められてきたのかを探る貴重な手がかりとなりうるのである。

4.　境界と陶酔 — 美と政治の狭間に立つエルンスト･ユンガー —

長谷川 晴生

エルンスト・ユンガーは，「境界(Grenze)」という用語を初期から後期まで一貫して用い続けた。この境界概念には，その内包する意味の方向性において，実存および空間の少なくとも二つの層を見出すことができると考えられるが，初期の

ユンガーはもっぱら前者に即し,人間と非人間的なものの境界を問題としていた。彼は人間が極限的な体験を通過することを「境界を越える」と表現し，戦場はこの意味における「境界」を顕現させることができる特権的なトポスとされる。こうして人間が「境界」を越境するとき，人間は非人間的ないし人間外的な境地としての「陶酔(Rausch)」に達することになる。

この「境界」と「陶酔」をめぐる枠組のなかでは,「陶酔」は単に美的な現象であるにとどまらず，必然的に政治的な意味をも有する。「陶酔」は，戦場から帰還した後の元戦士にとっては，政治的な主体としての人間を規定する「境界」の越境，ひいては破壊に等しいからである。こうして，戦場という境域に出現した「境界」を越えて「陶酔」に至る「美的」体験が，同時に社会の主体を確定する「政治的」現象の根拠となる,というユンガー特有の美と政治の連関が明らかになる。

本発表では,『内的体験としての闘争』(1922 年)を主たる読解の対象とし,「境界」と「陶酔」の鍵概念のもと，初期ユンガーの確立した美的要素と政治的要素の内在的変換関係を再構築することを試みる。

5. マックス･ヴェーバー「音楽社会学」からトーマス･マン『ファウストゥス博士』へ

山室 信高

マックス･ヴェーバーとトーマス･マンはともにドイツの市民的教養人としていわゆるクラシック音楽に造詣が深かったが，それは単なる趣味の範囲にとどまらず，彼らの仕事においても大きな位置を占めている。

マックス･ヴェーバーは第一次世界大戦前の 1912/13 年頃，音楽芸術に並々ならぬ関心を傾け，後に遺稿として出版されることになる「音楽社会学（音楽の合理的および社会学的基礎)」の研究に勤しんだ。まさしく情緒的な芸術と目される音楽にこそ，実は理性が働いており，合理化が進展していることをヴェーバーは洞察し，そこに彼の学問の主題となる西洋に独自な合理主義の範例を見出した。ただしそれはヴェーバーの見るところ非合理的なモメントを多分に孕んだ普遍史的なダイナミズムの産物である。

トーマス･マンは第二次大戦期に亡命先で祖国の崩壊を注視しながら小説『ファウストゥス博士』(1947)を執筆した。そこには数学的に厳密な音楽美を追求するなかで芸術的な不毛の危機に脅かされ，ついには悪魔と結んで究極の音楽を創造しようとして自滅する作曲家の姿を通して，合理化を遂げた音楽に潜む非合理性の逆転のドラマが描かれている。

本発表はヴェーバーからマンへの音楽をめぐる省察の主題的展開を追うことで,音楽の場合における「啓蒙の弁証法」を例証することを試みる。その際，ヴェーバーの「音楽社会学」は近年の大きな成果である『マックス･ヴェーバー全集』に収められた詳細な解説・註釈付きの新訂版を参照する。またマンの『ファウストゥス博士』に関しては，その音楽理論的な知見はもっぱらテオドール･アドルノや

アーノルト･シェーンベルクとの関連で論じられてきたが, ここではヴェーバーからのアプローチを行なうことによって従来とは異なる解釈の視角を提供したい。

口頭発表:文学 2

司会：宮田　眞治，Stefan Keppler-Tasaki

1.　アンデルセン『人魚姫』における脚部障碍の表象
― フケー『ウンディーネ』との比較

中丸　禎子

デンマーク後期ロマン主義の作家アンデルセンの代表作『人魚姫』は，ドイツ文学との影響関係の強さから，ドイツ語圏で最も盛んに研究されてきた。その際，①「人魚」モチーフ文学としてドイツ・ロマン主義文学に位置づけた通史的な研究と，②アンデルセンの同性愛に着目しての伝記的な研究が主流だった。本発表では，①で触れられることの少ない『人魚姫』のドイツ・ロマン主義文学との差異を明らかにするために，デンマーク語原典を分析し，フケー『ウンディーネ』(1811)と比較する。その際に，セクシュアリティの表象である「脚」が持つ他者性に着目することで，②に対して，作家個人の恋愛やセクシュアリティの問題に還元されない，文化史的な視野を提示する。

「脚部障碍者」は，キリスト教布教後のヨーロッパ文学において，悪魔や魔女に代表される異教的な他者として表象されてきた。本発表では，『人魚姫』を「脚部障碍者」を描いた作品の一例と捉え，人魚姫が，動物・異教徒・女性という三重の他者として描かれること，一方で，語りの視点の中心が人間ではなく人魚の側にあることを指摘する。人魚姫は，冒頭から一貫して水を蒸発させる太陽に憧れ，人魚から人間へ，人間から「空気の娘（水蒸気)」へと転生することで，絶えず自己を否定する。『人魚姫』は，「脚部障碍者」という他者に視点を同化させつつ，その他者の自己否定を描くという，他者への同化と排除が幾重にも重なった作品である。

2.　デープリンと死者の国 ―『マナス』について

時田　郁子

アルフレート・デープリンは叙事詩『マナス』(1927 年)の中で，インド神話に素材を得て，死者の国を描いた。それは「死者の原(Totenfeld)」と呼ばれ，生者の領域と地続きの「野原(Feld)」にあり，生者と死者が共存する。先行研究において『マナス』はほとんど注目されてこなかったが，ここにはデープリンの死生観を解明する鍵があると考えられるため，本発表は「死者の原」を分析し，このトポスの特徴を掴むことを目指す。

「死者の原」では，死者は「影」，生者は「肉体」を持つ存在とされ，人間は，「魂」が「肉体」に宿る間だけ生き，「肉体」から離れると死んで「影」になる。ここから「魂」と「肉体」の結びつきに応じて人間の生死を区別するデープリンの人間観が浮き彫りになる。主人公マナスは，「人間の魂」を意味する名前を持つ人物で，

「死」に恐怖を覚え「生」に絶望して，「死者の原」へ赴き，神々に「肉体」を奪われる。妻のサヴィトリは，夫を探しに「死者の原」にやってきて，自らの「肉体」を手放し，その代わりにマナスに「肉体」を与え，シヴァ神の随員になる。本発表ではこの夫婦の冥府下りを比較して「死」のイメージを明らかにし，次いで,「死者の原」に来る以前のマナスと半神的存在になった再生後のマナスを比べて,「生」のイメージを輪郭付ける。「死者の原」は,「生」と「死」が連続性を持つ舞台であることから，生命を産出し回収する始原の空間に相当すると推測される。

3. Erstarren der Vergangenheit und die Zukunft im Modus des Möglichen: Zeitlichkeit der DDR-Erinnerung bei Angela Krauß und Julia Schoch

Asako Miyazaki

In Angela Krauß' Erzählungen *Wie weiter* (2006) sowie *Sommer auf dem Eis* (1998) und in Julia Schochs Roman *Mit der Geschwindigkeit des Sommers* (2009) erinnern sich die in der DDR sozialisierten Erzählfiguren an die zusammengebrochene DDR. Dort erscheint die Zeitlichkeit der DDR-Vergangenheit im Kontrast zu ihrer Gegenwart, die von einem den kapitalistischen Gesellschaften seit den 1970er Jahren spezifischen Modus der „Beschleunigung" (Hartmut Rosa) geprägt ist. Sie wird mit dem Bild eines gescheiterten Fortschritts und mit der Verlangsamung verbunden. Wie hängen diese Wahrnehmung der historischen Zeit und das Geschichtsbewusstsein nach dem Zusammenbruch der DDR mit dem Erzählen über das individuelle Leben zusammen? Die ostdeutschen Erzählerinnen konfrontieren sich damit, dass die Zukunft nach der ‚Wende' plötzlich als etwas, das von Kontingenz und Unsichtbarkeit geprägt ist, erscheint. Durch das Erzählen der Erinnerung akzeptieren sie den neuen Modus der Zukunft und ihre Zukunft in diesem Modus. Dabei entsteht die Vorstellung, dass es eine andere Wirklichkeit gegeben hätte, in der die DDR weiter existiert hätte. Bei Krauß und Schoch bedeutet dies nicht die Hoffnung auf eine Weiterexistenz der DDR, sondern, dass sich die Erzählerinnen plurale Möglichkeiten einer Zukunft vorstellen können.

4. Kurdische Exilliteratur im deutschsprachigen Kontext

Theresa Specht

Dieses Forschungsprojekt möchte einen Beitrag zu einer erweiterten Perspektive in der germanistischen Exilforschung leisten, die sich bislang fast ausschließlich auf das Exil aus Nazideutschland 1933-1945 bezieht, und einen Gegenstand erschließen, der bisher kaum Beachtung findet: kurdische Exilliteratur im deutschsprachigen Kontext. Exilliteratur ist nicht losgelöst vom politischen Kontext der Herkunftsländer von Autorinnen und Autoren zu betrachten. Die Situation der kurdischen Exilliteratur ist allerdings insofern eine besondere, als dass sie sich auf keinen gemeinsamen

Herkunftsstaat beziehen kann. Das geographische Gebiet „Kurdistan“ verteilt sich auf die vier Länder Türkei, Irak, Iran und Syrien, in denen die Kurden jeweils einen kritischen Minderheitenstatus haben; viele Kurden leben im europäischen Exil. Mit den derzeitigen Friedensgesprächen zur sogenannten „Kurdenfrage“ in der Türkei ist das Thema zu Beginn diesen Jahres verstärkt auch wieder in die deutsche Medienöffentlichkeit gelangt.

Nach grundlegenden Gedanken zu den Begriffen „kurdische Exilliteratur“ und „kurdische Identität“ möchte ich in meinem Vortrag vorrangige Themen dieser Literatur aufzeigen und damit einen ersten Überblick über den Forschungsgegenstand geben. Dabei sind folgende Thesen zu überprüfen: a) In kurdischer Exilliteratur werden historische Ereignisse erinnert, die in der offiziellen Geschichtsschreibung der Herkunftsländer bislang kaum reflektiert werden. b) Durch die Reflexion historischer Ereignisse und gemeinsamer Erfahrungen tragen die Texte zur Konstitution einer kollektiven kurdischen Identität bei.

ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査報告
― 教育機関を対象とするアンケート結果から ―

ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査委員会 : 太田　達也，
高岡　佑介，生駒　美喜，神谷　善弘，柴田　育子，Michael Schart，
藤原　三枝子，星井　牧子，Marco Raindl，藁谷　郁美

日本独文学会ドイツ語教育・学習者の現状に関する調査委員会では，ドイツ語教科書協会，ゲーテ・インスティトゥート，Hueber 社の協力・支援のもと，2012 月 11 月から 12 月にかけて，ドイツ語の授業が開講されている全国の教育機関（総計 2091）を対象としたアンケート調査を実施した。本発表ではその結果をもとに，各教育機関（大学・短期大学・高等専門学校・高等学校）におけるドイツ語教育・学習者の現状について，以下の点を中心に報告する。

1) 高等教育・後期中等教育において外国語学習が占めるウェイト
2) 各教育機関に占めるドイツ語教員の割合，ドイツ語履修者数
3) 授業カリキュラム（ドイツ語科目の内容，週当たりの実施頻度など）
4) その他（授業環境としての教室設備，授業以外のドイツ語学習の機会など）

なお，ブース会場の外には，学会開催期間中，アンケート結果を図表にまとめたポスターを掲示する。

Der Vortrag gibt Einblick in die Ergebnisse der JGG-Umfrage zur Lage von Deutschunterricht und Deutschlernenden an japanischen Hochschulen, Oberschulen und Fachoberschulen, die Ende 2012 durchgeführt wurde. Berichtet wird vor allem über das Gewicht des Fremdsprachenlernens, die Zahl von Unterrichtenden und Lernenden, die Curricula (Inhalt des Unterrichts, Häufigkeit des Unterrichts etc.), Lernumgebungen, Deutschlernen außerhalb des Unterrichts etc. Während der Tagung sind die Ergebnisse auch ständig auf Postern vor dem Präsentationsraum einzusehen.

ポスター発表

- Ein inhaltsorientierter Unterricht als Vorbereitung auf einen Studienaufenthalt in Deutschland

Martina Gunske von Kölln

Im April wurde an der Wirtschaftsfakultät der Universität Fukushima ein Curriculum eingeführt, mit dem Studierende ermutigt werden sollen, für einen mehrwöchigen Studienaufenthalt nach Deutschland zu gehen. Da es für viele Studierende ihre erste Auslandsreise ist, gehen sie in Kleingruppen nach Deutschland an die Partneruniversität, der Ruhr Universität Bochum (RUB). Neben Sprachunterricht und Tandemlernen mit RUB-Studierenden erhalten die Studierenden in Bochum die Möglichkeit, sich mit Themen vertraut zu machen, die sie später für ihre Universitätsabschlussarbeit wieder aufgreifen können. Themen wie erneuerbare Energien oder Strukturwandel (Vergleich Tourismusregion Ruhrgebiet - Fukushima) sind nur zwei Themen, für die großes Interesse besteht.

Gegenstand dieser Posterpräsentation ist die zweijährige, sprachliche und inhaltliche Vorbereitung der Studierenden auf ihren Aufenthalt in Deutschland. Die Studierenden sollen in die Lage versetzt werden, möglichst viele Entscheidungen selbst zu treffen. Anhand von exemplarisch ausgewählten Lehrmaterialien eines Semesterkurses sollen folgende Punkte diskutiert werden:

1) Wie kann man Sprachunterricht (z. B. Schulung der Schreibfertigkeit) mit der inhaltlichen Vorbereitung der Reise verbinden und innerhalb eines Kurses gemeinsam unterrichten?
2) Wie können Lehransätze neben einer Inhaltsorientierung auch LernerInnenautonomie und Lernstrategien berücksichtigen und somit die Lernenden unterstützen, eigenverantwortlich ihre Reise mitzugestalten?

- „Echte“ und „falsche“ Regionalkrimis ― Beispiele aus dem Ruhrgebiet

Oliver Mayer

Der Regionalkrimi (kurz: Regiokrimi) ist seit knapp drei Jahrzehnten eine feste Größe der deutschen Kriminalliteratur. Regiokrimis zeichnen sich vor allem dadurch aus, dass ihre Handlung in einer bestimmten Region angesiedelt ist, deren Beschreibung viel Raum in den Romanen einnimmt. Dieser regionale Bezug ist zugleich sein Erfolgsgeheimnis, so dass Regiokrimis zu den meistverkauften Kriminalromanen gehören. Der Regiokrimi ist bisher weitgehend ein Marketinginstrument der Verlage, ich möchte den Begriff „Regiokrimi“ allerdings auf alle Kriminalromane erweitern, die in einer bestimmten, tatsächlich existierenden und realistisch beschriebenen Region spielen. Dabei ist eine Unterscheidung in „echte“ und „falsche“ Regiokrimis erforderlich, wobei eine Region

und ihre Bewohner in den „echten Regiokrimis“ aktiv in die Handlung eingebunden sind, und die Handlung des Romans zwingend in dieser Region stattfinden muss. Bei „falschen Regiokrimis“ hingegen ist die Region beliebig austauschbar. In der Präsentation wird anhand von Kriminalromanen aus dem Ruhrgebiet gezeigt, wie sich echte und falsche Regiokrimis voneinander unterschieden und welche Kriterien sich zur Bestimmung von echten Regiokrimis eignen.

- ドイツ語話速の機能と習得に関する考察

村田 優子

ドイツ語発話において，ドイツ語母語話者から良い流暢性評価を得るには 3.5 シラブル/秒の話速が必要であること（林 2007），また話速は超分節的特徴の中でも先行して高い度合いで習得されること（村田 2012）が先行研究では示されている。本研究では話速と発話内容との関係を明らかにし，また学習者の話速習得に対する母語話者の評価を見るため，母語話者と日本語を母語とする学習者の発話について以下の調査を行った。

まず，異なる発話内容におけるドイツ語母語話者の話速を測定し，1 秒あたりに読まれるシラブル数を算出した。その結果，全体の発話速度は内容によって変化するが，単語の調音速度はほぼ一定に保たれており，語を発音するスピードよりもポーズやフィラーの持続時間と頻度によって，発話内容による話速に変化がもたらされることが分かった。

次に日本語を母語とする学習者 7 名の発話における話速を，学習開始年と 2 年目の 2 回に渡り測定したところ，2 年目も 1 人を除き全員が母語話者速度までには達しなかったものの，話速の上昇は全員に確認できた。

また，その学習者音声に対するドイツ語母語話者による流暢性評価では，単語の発音速度の上昇よりもポーズやフィラーの持続時間の短縮が母語話者評価に影響を与えることが示された。

このことから，母語話者からの高い評価につながる適切な話速を習得するには「語を速く読む」ことよりも「ポーズとフィラーを適切に挿入する」ことが重要であると考えられる。この調査では話速以外の超分節的特徴，および分節的特徴が話速の習得と母語話者評価に与える影響を見ることが出来ていないため，今後の課題としたい。

- 日本人ドイツ語学習者のドイツ語音声における母音 /i/ /u/ /y/ の無声化
  ― 生成面からの観察 ―

安田 麗

本発表では，日本人ドイツ語学習者とドイツ語母語話者を対象に行った音声生成実験の結果を報告する。日本人の発音の特徴やドイツ語を発音する際に特に注意すべき点を母音無声化の観点より実証的研究を行い，音声指導に役立てること

を目指す。

日本語（東京方言）においては，無声子音に挟まれた母音「イ」と「ウ」は，ほぼ規則的に無声化することが知られている。この母音無声化現象がドイツ語を発音する際にも出現するのか，または日本人ドイツ語学習者とドイツ語母語話者の発音に違いがあるのかどうかを検証した。

被験者は日本人ドイツ語学習者 10 名とドイツ語母話者 10 名である。分析対象とした語は，3 音節のドイツ語有意味語，126 語である。検査語はいずれも C_1VC_2 の連続体を含んでおり，C_1 は無声子音 /h, k, ks, t, s, ʃ, ç, ts/，V は母音 /i,　u,　y/，C_2 は無声子音 /f, k, p, t, s, ʃ, sʃ, ç, ts/より構成されている。被験者にこれらの検査語を読み上げてもらい音声を録音し，音響分析を行った。

結果は, 日本人学習者の発音では母音/i/の無声化率は 16%, /u/ は 5%, /y/は 12% であった。一方，ドイツ語母語話者の発音では母音の無声化はほとんど観察されなかった。これらの結果より，日本人学習者はドイツ語を発音する際にも日本語を発音する際と同様に，母音を無声化させて発音していることがわかった。

- 役人フランツ･カフカと事故ネットワーク

横山 直生

本ポスター発表は，未だ周知されているとは言えないフランツ･カフカの資料，彼がプラハ労働者災害保険局で書いた『役所文書 Amtliche Schriften』（Kritische Ausgabe: S. Fischer. 2004）をめぐるものである。特に，労働と事故，保険法，メディア技術を介したデータ，並びに，同時代の言説における抑圧と欲望の現れへのカフカの対応を，下記のキーワードを中心に議論する。

発表者は聞き手に,『役所文書』「年時報告書 1915，1916，1917」の訳案と，プラハ局が当時，事故の調書作成等に用いていた「書込み用フォーマット」等の統計用資料を配布する。

a. **メディア機能** : 役所の仕事に用いられたタイプライターと写真, 事故と保険を扱う統計学と確率論，労働現場で使用される機械といった，現実を別の形に変えて処理を行う装置とその機能について

b. **個別端末** : 保険局･陸軍･商工組合といった保険利権に絡むもの, 労働作業者の手，傷痍兵の失われた手足，統計よって特定の危険度クラスに分類された工場といった，様々な立場からの現実への接近について

c. **伝送網と痕跡**, **ネットワーク機能** : 個人的な事故－保険統計学－カフカという経路，戦線から流れ込む傷痍兵と神経症，役人仕事と文学執筆の関係といった，此処と別の時と場をつなぐ情報や力の伝送について

ブース発表１

- Lesekompetenz und Lesekonzepte ― Ein Vergleich zwischen Leseverhalten und Lesestrategien bei japanischen Deutschlernenden

Yoshiko Nishide, Yutaka Takatsugi, Shinichi Sakamoto,
Yoshinao Furukawa, Serina Kashiwagi

Beim Lesen eines deutschen Textes von japanischen Deutschlernenden fällt eine Art zu Lesen auf, nämlich den Text Wort für Wort übersetzend zu verstehen. Die Verschiedenheit des „Leseverhaltens“ zwischen einer solchen eher als Grammatik-Übersetzungsmethode zu bezeichnendem Lesen und dem Lesen, das in deutschsprachigen DaF-Lehrwerken sowie den entsprechenden Prüfungen verlangt wird, ist der Ausgangspunkt dieser Präsentation, unbewusste Strategien beim Fremdsprachenerwerb bewusst zu machen. Dabei ist nicht entscheidend, welche Methode besser ist, sondern, ob dieser Faktor eigentlich von den Lehrenden erkannt und an die Lernenden adäquat vermittelt wird. Dieser Kabinenvortrag möchte daher Aspekte des von den Referentinnen/-ten gemeinsam bearbeiteten Themas „Lesekonzepte in japanischen- und deutschsprachigen DaF-Lehrwerken“ vorstellen.

Das Leseverhalten setzt „Lesestrategien“ voraus, die sich auf in der jeweiligen Kultur praktizierte explizit oder implizit erworbene Techniken beziehen, denen ein kulturspezifisches Konzept zugrunde liegt. Aufgrund der Einsicht, dass der Unterschied zwischen japanischem und deutschem Leseverhalten auch mit den jeweiligen Lesestrategien in Zusammenhang steht, wird auf die folgenden Punkte eingegangen: 1.) Lesestrategien in deutschsprachigen DaF-Lehrwerken: Globales Lesen, Selektives Lesen, Detailliertes Lesen; 2.) Lesestrategien in japanischen DaF-Lehrwerken; 3.) Vergleich von Leseverhalten in Deutschland und in Japan mit einem Ausblick auf Lesestrategien; und dann als praktischer Teil 4.) Analyse von japanischen- und deutschsprachigen DaF-Lehrwerken in der Unterrichtspraxis; 5.) Vorschläge zur Didaktisierung von Lesestrategien und zur Verbesserung der Leseleistung in DaF in Japan.

In der Abschlussdiskussion soll aufgenommen werden, wie die in diesem Rahmen erhobenen Untersuchungsaspekte in der Unterrichtspraxis berücksichtigt werden können/sollen.

ブース発表 2

- カフカ文学における異文化性とユダヤ性

林嵜 伸二

カフカ文学の中で，とりわけ1914～1917年に頻出する異文化性（異国，異人，異文化間の遭遇と関係）の描写は，その頃カフカを悩ましていたユダヤ人問題（自らのユダヤ的アイデンティティーの問題）と密接な関係があるのではないか。この関係についての研究ははまだ少ない。

その理由としては，シオニズムやユダヤ人の否定的イメージに過敏なドイツ国内ではカフカ文学におけるユダヤ性（とりわけシオニズム像）についての研究もあまり進まないという事情が一方であり，他方でドイツ国外ではカフカ文学の異文化性の研究が，自国の成り立ちの問題に立ち入ることを研究者に強いる場合もあって，避けられがちであったという事情がある。

しかし，「カフカ文学における異文化性とユダヤ性」についての包括的研究は，カフカが描かなかった，そしてユダヤ民族との利害関係が比較的小さい地域（例えば日本）でなら可能であると考える。加えて，近年になってドイツ内外で異文化学やポストコロニアル批評の影響のもとに，カフカ文学の異文化性への注目が増してきており，カフカ文学におけるユダヤ性についても，主にドイツ国外の研究者によって精力的に進められつつある。

本発表では，このような近年のドイツ内外の研究状況の変化も踏まえ，上記テーマについて今日日本でなし得る研究がもつ可能性を論じたい。 また，日本ではどのように（カフカの）ユダヤ人問題にアプローチすべきかという問題についても意見交換をしたい。

シンポジウム Ⅲ（ドイツ語教育部会企画シンポジウム）
生涯教育としてのドイツ語教育を考える
― 高校，大学，卒業後を見据えたドイツ語教育へ向けて ―

司会：神谷 善弘，生駒 美喜

ドイツ語に限らず，外国語を学ぶ環境は実に多様化してきている。日本における学校教育では英語のみが外国語として扱われることが多いが，ドイツ語など他の外国語を学べる高校も一定数存在する。さらには，親の海外駐在等の理由でドイツ語圏滞在経験のあるいわゆる帰国子女が大学で引き続きドイツ語を学習するというケースも見られる。また，大学外ではドイツ語圏への短期語学留学や交換留学等の可能性があり，卒業後もドイツ語学習を続けるという可能性も開かれている。

このようにドイツ語学習の環境や機会は大学教育以外にも多く存在するのにもかかわらず，日本独文学会員およびドイツ語教育部会員の多くは大学教員であるがゆえに，我々はドイツ語学習を大学教育という狭い土壌で考えがちである。一方で，ここ数年の間に大学でのドイツ語教育において指針とされることが多くなった CEFR（欧州共通参照枠）は，外国語の学習を一生に亘るプロセスとして捉えている。その根本理念は我々にとっても大いに参考になり，尊重すべきだと思われるが，残念ながら現状はそうはなっていない。たとえば，学生に「卒業後はドイツ語の知識を使える職業はどのようなものがあるか」はもとより，「卒業後，ドイツ語学習を続けることができるか」という問いにさえ，明確に答えられる教員はどのぐらいいるのだろうか。

そこで，ドイツ語教育部会としては，このような問題意識に立ち，単に大学でのドイツ語学習にとどまらず，生涯におけるドイツ語学習を扱い，生涯教育という視点から，CEFR の意義と活用について今一度見直し，高大接続・連携の視点からドイツ語教育とはどうあるべきかを議論し，学校･大学外でのドイツ語学習，卒業後のドイツ語学習の可能性を紹介するシンポジウムを行いたい。具体的には以下のテーマを取り上げる。

1）生涯教育からみた欧州共通参照枠：その意義と活用について
2）高等学校における多言語教育と高大接続・連携
3）大学外・卒業後を視野に入れたドイツ語学習の可能性

1）については，生涯教育全体に関わり，日本におけるドイツ語教育でも重要視される欧州共通参照枠について，今一度その意義と活用を考える。2）については，ドイツ語および他の外国語について，高校での教育，高大接続・連携について実地で携わっている，フランス語教員，中国語教員，ドイツ語教員の 3 名が発表する。3）については，ドイツ大使館，ドイツ学術交流会，ゲーテ・インスティトゥート，民間の語学学校，日独協会，Karl Duisburg 協会等などにお願いして得られ

たドイツ語学習関連の情報を紹介する。必要に応じて，各団体の代表者に直接情報を提供してもらうことも検討している。こうすることで，ドイツ語教員が情報を得にくい学外および社会人を対象とするドイツ語教育情報をまとめて提供することができる。

1. 生涯学習としてのドイツ語学習 ― CEFR を参考にした制度設計に向けて ―

境 一三

日本におけるこれからのドイツ語学習･教育は, 生涯学習の視点から議論され, 制度設計されなければならない。学校における学習は生涯学習の一部を占めるに過ぎず，より充実した社会生活を送り，自己実現を図るためには，学校教育外で有意義な学習活動を行いうる方略と技術を身につけることが必須である。学校におけるドイツ語教育もまた，生涯学習を有効に機能させるための基礎能力を養成する場として機能しなければならない。そして，ドイツ語教育は，複言語・複文化能力養成の一部分として構築されなければならない。ドイツ語は，母語や英語などと共に, 個人を形作るものであり, 遅くとも中等教育の選択肢の一つとして, 他言語と共に提供されなければならない。

上記の目的を達するためには，国民的議論が必要だが，そのための共通の概念装置や議論の場が必要である。『欧州共通参照枠』（CEFR）は，優れた先行例として参考にすべきである。

近年日本においても CEFR が注目され，特に英語教育ではその中の「共通参照レベル」や「能力記述文」（Can-do Statements）が脚光を浴び，文部行政にも影響を与えようとしている。しかし，CEFR の適用としては一面的であり，その中核的な理念であり，本来最も注目されなければならないはずの複言語・複文化主義や行動中心主義などは，言語教育界一般の耳目を引くところには至っていない。本発表は，複言語主義の立場から今後のドイツ語学習・教育を構想するものである。

2. フランス語教育の高大接続・連携

山崎 吉朗

文部科学省初等中等教育局国際教育課「高等学校における国際交流等の状況」によると，英語以外の外国語を開設している高等学校は，1991 年に 219 校（公立 100 校，私立 119 校）であったものが，2007 年には 788 校（公立 561 校，私立 227 校）まで増加した。2009 年には 729 校（公立 540 校，私立 189 校）に減少しているが，ドイツ語，フランス語，中国語，韓国語を中心に，最新のデータを発表する。また，大学入試センター試験における英語以外の外国語の現状と展望にも触れる。

次に，2010 年に実施された日本フランス語フランス文学会と日本フランス語教育学会との共同調査から，高校対象と高校生向けアンケートの結果を紹介する。

高校におけるフランス語教育は受験を目的とした第 1 外国語から異文化理解のツールとしての第 2 外国語教育へと中心が移動しているようである。特に公立高校で広がりを見せるフランス語教育だが，その大半は非常勤教員が担っており，学校内での十分な発言力も持っていないのが実情であろう。また，高校生対象のアンケートは，現場の印象や意見を裏付けるものとなった。フランス語選択は多くの高校生がたとえ周囲に相談しても自らで決定している。その理由は，フランスに行ってみたい，授業が面白そうだからである。実際の授業は，難しいが，楽しい・どちらかと言えば楽しいという反応が大多数を占めている。

最後に，中央教育審議会等で議論されている生涯教育と学校教育の関係を述べる。

3. 中国語教育の高大接続・連携

藤井 達也

まずは，埼玉県立伊奈学園総合高等学校における英語以外の外国語教育について概観する。大学入試に対応できる力を育てるばかりでなく，発声指導にも力を入れ，ネイティブのように話せるようになることを目指している。ドイツ語・フランス語・中国語を選択する生徒は，ゼロからスタートし，3 年間で大学受験レベルの実力をつけることを目標にしている。そのために補習や合宿を活発に行っている。各言語の ALT の先生も熱心に指導している。中国語教員については，日本人担当者 2 人のほかに，中国語 ALT が 2 名おり，発音・会話・作文等の丁寧な指導を受けることもでき，すべての科目を履修すると，計 18 単位もの中国語の単位を修得することができる。

そして，中国語教育の高大接続・連携について，高等学校学習指導要領（カリキュラム），高校生対象の教科書等の高等学校における中国語教育の問題点，大学入試センター試験をはじめとする大学入試の現状と課題，大学における既修者の受け入れ体制，高等学校による教育実習生（大学生，大学院生）の受け入れ等の教員養成に関する問題点，教員採用，教員研修（教員免許状更新講習を含む）等について報告する。

最後に，発表者が作成プロジェクトメンバー（中国語部会リーダー）として深くかかわった，2012 年 3 月に公益財団法人国際文化フォーラムが発行した「外国語学習のめやす 2012 ― 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言」について簡単に紹介する。

4. ドイツ語教育の高大接続・連携

吉村 創

ドイツ語科目を開設する高等学校の数は，年々増えている。文部科学省初等中等教育局国際課「平成 20 年度高等学校等における国際交流等の状況について」によると，1993 年度におけるドイツ語科目開設校数 73 校に対し，1995 年度 75 校，

1997 年度 97 校，1999 年度 109 校，2001 年度 107 校，2003 年度 100 校，2005 年度 105 校，2007 年度 157 校，2009 年度 143 校と増えている。しかし，開設校数を絶対的に見るならば，その数は未だごく少数である。そのためか，全国の高等学校においてどのようなドイツ語教育が行われているのか，その実際を知る機会は少なく，また情報発信の機会も極めて少ないのが現状である。

本発表では，慶應義塾を例にとり，中学校および高等学校におけるドイツ語教育についてどのような取り組みが行われているのか，紹介を行う。具体的には，例えば，カリキュラム，授業時間数，履修人数，教材，授業方法，及び，ドイツ語技能検定試験の受検や獨協大学主催の高校生ドイツ語スピーチコンテストへの参加等の学校外での活動について報告する。

また，慶應義塾における中学校と高等学校，高等学校と大学との連携についてはどのような状況であるのかについても，情報を提供する。

本発表と，フランス語および中国語における中等段階教育についての発表を並立させることにより，語種をこえた第二外国語教育の在り方について考察を広げるきっかけとしたい。

5. 大学外・卒業後を視野に入れたドイツ語学習

清野　智昭

ドイツ語学習を生涯にわたるプロセスとして考えれば，必然的に，大学外や大学を卒業した後の学習をどう行うか，また，獲得したドイツ語の知識をどう活用するかを視野に入れなければならないし，我々大学教師もそのような情報に通じていなければならない。大学外でのドイツ語学習をサポートする，あるいは，有益な情報を得られる機関には，ドイツ大使館，ドイツ学術交流会，ゲーテ・インスティトゥート，民間の語学学校，日独協会，Karl Duisburg 協会等がある。それらの機関から集めた情報を提供し，共通の理解を促進する。

大学外のドイツ語教育の可能性および獲得した知識をどう活用するかは，学習者にとっては切実な問題である。しかしながら，我々ドイツ語教師はその点での知識に著しく欠けると反省しなければならない。学生に「大学を出たらどのようにドイツ語学習を続けたらよいか」，「せっかく身につけたドイツ語の知識を使える職に就きたいが，どういう可能性があるか教えてもらえないか」と聞かれても，満足できる答えを持ち合わせていないからである。我々が就職を世話できるわけではないが，少なくとも，ドイツ語を使える職業の可能性，具体的な企業などの情報を得ておくのは必要であるし，その知識の共有もするべきである。それをまとめた形として一度に提示することは，日本独文学会員およびドイツ語教育部会員にとって非常に有益であると考えられる。

シンポジウム Ⅳ
ドイツ語研究に今日的自律性はあるのか ― 方法（論）をめぐる考察

司会：小川 暁夫／コメンテーター：高橋 輝暁

今日，言語研究の自律性は部門的，組織的・制度的にも，あるいは学問体系的にも脅かされつつある。逆に言えば，歴史をふりかえるとき，これがある程度保証されていたように思われるのは，歴史比較言語学が勃興し，定着した 19 世紀はじめ，さらには，構造主義言語学（音韻論）の隆盛期ぐらいにとどまるであろう。アメリカの言語学で言えば，生成文法と認知言語学が一時期そうであったと言えようか。自律性とは言えないまでも，「現代」ドイツ言語学の際立った特性は，かつてはヴァレンツ文法やテクスト言語学に求められたが，今日的にはやや極端に言えばメディア言語学か異文化コミュニケーション研究の一角にその痕跡がかろうじて留められているぐらいではないだろうか。もちろん，この事情は学術研究のいわゆるグローバリズムと無縁ではないどころか，それによって加速されてもいる。

このような動向を背景に，渡辺は，（ドイツ）言語哲学と現代メディア言語学との結線を導き出すことで，ドイツ語研究・言語研究に独自の位置づけを試みる。小川は，従来型の記述言語学が（少なくともドイツ語圏における）言語研究の「王道」と見なされてきた実情を踏まえつつ，その建設的解体作業，そこからの転回の必要性を主唱する。宮下は，「観念的」と揶揄されることもあった，ドイツでの意味研究の伝統に現代の認知言語学の知見の萌芽，胎動を見て取り，言語研究の新たな方法論の見取り図を描く。井出は，ドイツ語史・ドイツ語史研究をアクチュアルに解釈し直すことで，その展開が言語研究の学際性への出発点となることを示唆する。このように，各報告者がドイツ語研究の自律性を方法論的視点から模索し，再構築の可能性を探るなかで，コメンテーターの高橋は（言語）文化学，あるいは（非ドイツ語人による）ゲルマニスティクの観点からドイツ語研究・言語研究への問題提起・提言を行う。

本シンポジウムの構想には，実は言語研究からの「ノマド的沃野」や「開放系のパラダイム構築」への希求が通奏低音にある。これは，今日広くは人文（科）学の研究者に，とりわけドイツ語研究者を含む個別言語研究者にしばしば観察される「突破口」を求める知的希求の態度でもある。

今日ではドイツ語研究の自律性は，個別言語研究の在り方，言語研究一般に対する寄与，隣接する学問領域との関わり，ゲルマニスティクにおける布置，さらには非ドイツ語人による研究の意義にいたるまで重層的に眺望し，それを再構築することによってしか模索，確立できないものであろう。シンポジウムの参加者も含めた多角的議論によってその突破口への手掛かりを見いだしたい。

1.　言語哲学とメディア言語学 ― ドイツ語研究のための新たなリンク

渡辺 学

1830 年代までを中心に活動したヴィルヘルム・フォン・フンボルトの言語論，言語哲学的著述の中の知見は，そのいくつかが超時代的有効性をもつように思われる。ただし，エネルゲイア，世界観，内的言語形式等の概念のもつあいまい性は批判の対象ともなってきた。一方，現代のいわゆるデジタルニューメディアの言語学（たとえば，携帯メール，ブログ，ツイッターにおける言語使用の特性）をめぐっては，そのプラットフォームや視覚的記号の多様性に富む言語現象の新奇性に幻惑された研究者が一瞬，研究方法を見失いそうにもなる。しかしそこには，インタラクション，コミュニケーションはもとより文体・スタイルの創成の問題，またアイデンティティ開示・呈示の問題等，古くて新しい問題圏の鉱脈がある。ここにフンボルト的な言語「観念」論的アプローチを試みると何が見えてくるか。一見異なる二つの時代，テーマ圏を連接することは果たして可能なのか。本報告では，フンボルト的視座を中心に，その他の言語哲学・言語論，さらにはニクラス・ルーマン等のコミュニケーション・社会理論も適宜参照しながら，ドイツ語のニューメディアの実情と対峙していく過程で照射される問題性を示しつつ，ドイツ語研究の「今日的」方向性のありかを探る。キーワードは，「アイデンティティ」，「自己呈示」，「解釈（学）」である。報告の中でおのずと人文学の現代的な構図の一断面が映し出されることになる。

2.　ドイツ語「記述」文法の転回 ― 類型論の観点から

小川 暁夫

本報告では従来型のドイツ語記述文法を類型論，とりわけ機能類型論の視点からあえて解体することで，ドイツ語研究のあり方に転回をもたらすことを示唆し，その今日性，学際性について議論したい。今日性とは「なぜ今，またこれからもドイツ語を研究対象とするのか」，学際性とは「ドイツ語研究はいかに隣接領域と相互に寄与していけるか」という問いである。これまでのドイツ語記述文法では「範疇」画定，「分類」整理，また「用法」解説が中心を成してきたと言えるが，そこでは「ドイツ語とはこのような言語である」というレベルに留まり，「ドイツ語はなぜそのような言語なのか」という原理的な問いは未解決のままである。「範疇」はいかに画定できるのか，自己目的化した不整合な「分類」はいかに回避できるのか，また（記述的に）多様な「用法」はいかに顕現するのか，などの問題は，（自己充足的でない）開かれた系としてのドイツ語研究にとって重要な課題，挑戦である。その点，機能類型論は「範疇」「分類」「用法」を柔軟に相対化し，個別言語内での特徴群に連動関係を見，それらを一全体（holistic）タイプとして浮き彫りにしようとする。実質化や検証可能性という乗り越えるべき壁はある。ただ，そこに「なぜそのような言語なのか，言語とはなぜそうなのか」という問い

へのヒントがあり,それこそが今日性,学際性への手掛かりとなるのではないか。ドイツ語研究の自律性が逆照射されるとも言えようか。

3.　ドイツ意味理論と認知言語学の出会い ―「エネルゲイア」としての文法研究

宮下 博幸

1980 年代以降，北米の西海岸を中心に勃興してきた認知言語学では，形式が生み出される背景にある認知様式（＝意味）に焦点があてられるようになった。これは生成文法の形式中心的なアプローチから，その背後にある意味を重視するアプローチへの転換であった。この認知言語学の立場は一見すると新しいもののように見える。しかしドイツ語圏の言語研究の歴史をひもといてみると，実は意味の重視がドイツ語圏の伝統であることがわかる。フンボルト，ガーベレンツ，ヴァイスゲルバーといった一連の研究者は，力点は異なるものの，いずれも意味形式もしくはその表出に言語の本質を見ていた。日本のドイツ語研究者である関口存男もまた，この流れの中にある。ドイツ語圏と結びついた言語研究は，意味を出発点とした研究の先駆であった。このような本来ドイツ的な伝統は，戦後の言語学界において,「観念的に過ぎる」というレッテルを貼られて省みられなくなったが，認知言語学が隆盛を極め，意味が科学的な研究対象となっている現在，再度伝統的鉱脈に目を向け，そこから隠された宝を発掘し，それを認知言語学の知見と結びつけることで，言語研究の新たな方向性を打ち出す可能性が浮上してきた。このような背景のもとで，本報告ではまずドイツ語圏の意味重視の伝統と，今日行われている認知言語学の橋渡しを目指す。またさらに両者を止揚した形での，ドイツ語研究・言語研究の新たな可能性を提示したい。

4.　行為，言語，可視化 ―『ザクセン法鑑』の挿絵から

井出 万秀

『ザクセン法鑑』挿絵のいくつかにおいて，国王選出や皇帝戴冠の儀式など，いわゆる「シェーマ」全体が視覚化され，歴史的知識にもとづき理解できるものとは異なり，描かれている行為や仕草のみでは何が伝えられているか明確ではないものが存在する。その図像の背後にある言語行為のひとつは「拒否」「不可能」である。いわば「否定」が図像化されていると言えるが，言語一般に普遍的に観察される「否定」という行為は一義的に図像化することが困難であると推測される。ハイデルベルク写本では，一方の手でもう一方の腕を掴む，という仕草で首尾一貫して視覚化されているのに対し，ヴォルフェンビュッテル写本ではそのような首尾一貫した記号化がみられない。この相違から,「拒否」「不可能」,ひいては「否定」という一般的で汎用性のある言語行為は図像化に際して改めて記号化する必要があると推測される。言語伝達では一字一句が記憶されるのではなく重要なメッセージのみが長期記憶に保存される，という認知的言語情報処理原則を前提とするならば,法律条項の中でどのような言語行為が視覚化されているかの分析は,

条項理解の鍵となる言語行為を抽出することを可能にする。人間の認知の在り方が時代を超えて普遍的なものであると前提するならば，古い時代のテクスト分析から人間の認知とその言語的反映の普遍性を探ることも可能なはずである。

口頭発表：語学

司会：黒田 廉，時田 伊津子

1. Koordination und Integration suprasegmentaler Merkmale im Japanischen bei deutschen Muttersprachlern

Yuki Asano

In der Sprachperzeption werden verschiedene prosodische Merkmale (z.B. Länge und Tonhöhebewegung) gleichzeitig integriert. Die Studie geht der Frage nach, wie muttersprachliche und fremdsprachliche Länge und Tonhöhebewegung in der Sprachperzeption gleich oder anders gewichtet und integriert werden.

Dazu testeten wir in einem AX-Task die Diskriminierung 1) der konsonantischen und vokalischen Länge und 2) der Tonhöhebewegungen. Die Stimuli zeigten japanische phonologische Merkmale auf. Darüber hinaus wurde die Dauer des Interstimulus-Intervalls mit 300 und 3000 Millisekunden variiert, um die Gewichtung der Länge und Tonhöhenbewegung in einem unmittelbaren und verzögerten Entscheidungstask (bzw. im phonetischen und im phonologischen Prozess) miteinander zu vergleichen. 24 japanische Muttersprachler, 24 deutsche Muttersprachler, die keinerlei Japanischkenntnisse haben sowie 48 deutsche Japanischlernende nahmen am Experiment teil. Analysiert wurden die Reaktionszeiten und d' (Macmillan & Creelman, 2005), welche die Sensitivität in einer Entscheidung darstellt.

Unsere Daten von den japanischen Muttersprachlern zeigten starke Gewichtung der Länge in der Diskriminierung der Tonhöhebewegung. Dies nahm aber im Laufe der Zeit ab. Das bedeutet, dass dieser Effekt der Länge auf Tonhöhebewegung mehr akustisch/phonetisch als phonologisch war. Deutsche Muttersprachler zeigten erhebliche Schwierigkeiten, die Länge und Tonhöhenbewegung zu unterscheiden, die im Deutschen phonologisch nicht vorhanden sind, und diese Schwierigkeit bei der phonologischen Speicherung der Information war größer als bei akustischer Wahrnehmung.

Macmillan, N. A., & Creelman, C. D. (2005). *Detection Theory: A User's Guide (2nd edition)*. Mahwah, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.

2. 前置詞融合形に関する考察 ―ドイツ・ルール地方の地域語を例に―

上村 昂史

ルール・ドイツ語（‚Ruhrdeutsch'）とは，19世紀後半のドイツ産業革命による炭鉱業の発達と労働者の移住によって，ドイツ北西部ルール地方で形成された地域語である。先行研究では，ルール・ドイツ語の文法的特徴について，低地ドイツ語およびオランダ語の方言における特徴が継承されていることが指摘されている。したがって，それらの方言を基底とし，ドイツ標準語との混成が起こったという

説が，ルール・ドイツ語研究者の間で一致している。一方，その特徴に関する現象で，Schiering（2005）は前置詞と定冠詞の融合形が，標準ドイツ語における融合形より一般化が進行し，名詞の性と数による「屈折（Flexion）」を認めることが出来ると主張している。しかし，発表者の調査では，その前置詞融合形の一般化は限定的であることを示す結果を得た。

本発表では，このSchiering（2005）の記述に部分的な修正を行い，ルール・ドイツ語における前置詞融合形の一般化は確かに標準ドイツ語より大きく進んでいるものの，限定的であることを述べる。まず，屈折とはどのような条件によってそう言えるのか，その定義を明らかにする。次に，発表者が行なった調査で，ルール・ドイツ語話者の会話コーパスを分析した結果について述べる。最後に，得られた調査結果の要因について，音韻論的条件，前置詞の品詞の特性，および標準語との混成を考慮して説明する。

3.　ドイツ語辞典における「定義語彙」調査

山田 善久，在間 進

「定義語彙（Defining Vocabulary）」は，辞書の見出し語の語義記述に用いられる基本的な語彙を指す。英語関係では，「定義語彙」に関して，様々な研究があるが，ドイツ語辞典（独独辞典）の「定義語彙」に関する研究は皆無と言ってもよい。

本発表では，まず，Langenscheidt Großwörterbuch Deutsch als Fremdsprache の第一語義の記述に用いられている「定義語彙」の調査結果を示す。この調査の目的は，ドイツ語辞典の語義記述にどのような語彙が用いられているか，そしてそれらは，妥当性を持って一定数の「定義語彙」に収れんできるものであるかを検証することである。

次に，上記の調査結果に基づく「定義語彙」リストをドイツ語学習の観点から見直し（使用頻度も含む），「より有用な定義語彙」を提案する（ロングマンやケンブリッジの辞書は約 2000 語，オックスフォードの辞書は約 2700 語を「定義語彙」として用いているとのことである）。そして，これらの「定義語彙」によるドイツ語基本語彙の語義記述の具体例を示す。

語義記述は，一般的に，一定数の示差的意味特徴によって行なわれるが，このような抽象的な記載に対して，日常語でもある「定義語彙」による記述は，具体性に富み，「定義語彙」そのものも同時学習ができるという実用的なメリットもある。したがって，「定義語彙」の，このような調査・分析は，ドイツ語の語彙学習に一つの新たな可能性を拓くことになる。

4.　日独比較マルチモーダル分析 ― 説明場面に見られる問題提示の手続き ―

白井 宏美

本発表では，知識量の違いが明らかな相互行為的コンテクストにおいて，聞き手は「わからない」と思った際，「わからない」をどのようにマルチモーダルに可

視化するのかを明らかにすることが目的である。

データは初対面の女性同士による二者間会話（日本 6 組，ドイツ 6 組）合計 120 分（各 10 分）である。医学専攻と法学専攻の大学院生・大学生が専門分野の異なる相手に自分の研究テーマを説明する場面を設定し，日独の両国において同一条件下で 4 台のデジタルカメラを使用し質の高い映像を収集した。

データを観察すると，話し手から説明を受けている時，聞き手はほとんどの時間，話し手に視線を向けているが，時折視線をはずすことがある。この「視線はずし」を中心に，他のモダリティと共起することで「わからない」を可視化することを示す。「わからない」の可視可について今回観察されたパターンは次のとおりである。

(1) 視線はずし単独
(2) 視線はずし＋微笑み
(3) 視線はずし＋あいづち
(4) 視線はずし＋あいづち＋頷き
(5) 視線はずし＋あいづち＋頷き＋微笑み

聞き手が，あいづちを打って頷いていても，視線をはずしていれば，聞き手が理解していることを行為から確認できないこと，そして話し手も聞き手の理解を確信していないことがわかった。また，ドイツ語データにおいて，さまざまなモダリティーが時系列的に組み込まれる例が観察された。

口頭発表:文化・社会

司会：大宮 勘一郎，古澤 ゆう子

1. 「書籍学講座」における研究と教育 ― マインツ大学の事例を中心に ―

竹岡 健一

発表者は近年，ドイツにおける会員制の廉価書籍販売組織「ブッククラブ」に関する研究の過程で，書籍の製造・普及（販売）・受容を主な研究対象とする「書籍学（Buchwissenschaft）」の重要性を強く意識するに至り，ドイツの大学におけるこの学問分野の発展について，文献調査と現地調査を行った。本発表は，それらの成果に基づき，次のような内容を扱う。第一に，ドイツの大学における書籍学関連教育課程の現状を通して，この学問分野の成立時期，主な研究対象，方法論的特色，教育における職業実践的傾向の重視などを確認する。第二に，書籍学の独立性をめぐる議論に目を向け，書籍研究の長い伝統の中で新たにこの学問分野が登場した経緯とその問題点を跡づける。第三に，マインツ大学書籍学講座の事例を取り上げ，グーテンベルクとインキュナブラを主な研究対象とするマインツ市の寄付講座から書籍をめぐるアクチュアルな諸問題を扱うアカデミックな研究所への発展と，教育面での職業実践的な傾向の強まりを指摘する。第四に，書籍学講座を特徴づける職業実践的な教育の具体例として，実務家を交えた講義，図書館・文書館等での研修，教育用印刷所での実習，書籍見本市への参加，出版社文書館の活用などに言及する。以上の説明の後，書籍の経済的・物質的側面を重視する書籍学に関する知見を得ることがわが国における文学の研究と教育の発展にもたらす意義を述べ，結論とする。

2. 仮面と身体表象 ― 表現舞踊における仮面の解釈をめぐって ―

照井 夕可里

表現舞踊は，即興性を特徴に持ちながらも恣意的な動作ではなく，ヨーロッパの芸術論を長く支配してきたクラシックバレエの正当性に疑問を提起しながら，従来の理論が舞踊芸術の神髄の露呈にとって不十分であることを示唆する身体表象である。

表現舞踊以前の代表的な舞踊であるクラシックバレエでは，外在的な制度や象徴的な問題は探求の射程外にあった。これに対し，表現舞踊は身体が社会組織の中に位置することを舞踊で体現する。これにより，クラシックバレエが物語を表象する身振り ― 直接的な身振り ― であるのに対し，表現舞踊が抽象的な関係を描写する身振り ― 隠喩的な身振り ― であることが認められるのである。

表現舞踊の中で仮面は，社会に埋没する人間の存在の深層にある自己を掘り起こし，人間を超えるものへの志向を現実化する方法として用いられている。

表現舞踊の仮面と自由な身振りは，社会に規制された顔の表情と人間の感情表

出と相似し，社会的な自己抑制を深く内に潜めた人間的な役割を担っている。とりわけ仮面は，人間の顔の表情と身体表象の対照関係を様式化し強調することにより，内面の発露 ― 主観性と客観性 ― への理解と共感を深化させようとしている。

本発表では，表現舞踊における仮面の解釈に焦点を当て，仮面と身体表象の関連を論証することを目的とする。表現舞踊家が伝統的な舞踊から脱却し，外界との葛藤の末に手に入れようした自由と自己の再構築の関係性を中心に，舞踊作品の見地から考察し，仮面の意味を解明したい。

3.　イタリアとドイツの幸せな結婚？ ―『マーサの幸せレシピ』をめぐって ―

木本 伸

本発表ではドイツ映画『マーサの幸せレシピ』（Sandra Nettelbeck: Bella Martha, 2001）の作品解釈を行う。この作品は『厨房で逢いましょう』や『ソウル・キッチン』など，「食」をテーマとする一連のドイツ映画の出発点に位置している。一般にドイツ作品は抽象的な理念に陥りやすく，食や性などの感性に乏しいといわれるが，このような文化的伝統において『マーサの幸せレシピ』は注目すべき作品と言えるだろう。

舞台はハンブルクの高級レストラン。このレストランのシェフであるマルタは自分の仕事に絶対の自信を持っている。彼女は他人を寄せ付けず，料理を極めることだけしか頭にない。自分が食事を楽しむことさえ余計なことだ。そんな彼女は，なぜか「街で 2 番目のシェフ」と呼ばれている。つまりマルタには何かが決定的に欠けているのだ。料理の腕は完璧だが，それだけでは足りないものがあるのだろう。ある日のこと，彼女は交通事故で母親を失くした姪のリーナを預かることになる。リーナはマルタを拒絶し，叔母が作る料理も口にしようとはしない。ところがリーナはレストランで働くマリオにだけは心を開く。職場の規則には無頓着で，何よりも人生を楽しむイタリア人のマリオには，完璧主義者のマルタにはない何かがあったのだ。初めはマリオを毛嫌いしていたマルタもリーナを介してマリオに惹かれ，彼から大切なものを学んでいく。

この映画には「几帳面で神経質なドイツ人」と「楽天的なイタリア人」というステレオタイプが認められる。作品中のハンブルクの寒さとイタリアの暖かさの描き方も対比的だ。このステレオタイプの当否は別として，ここには科学や経済など計量可能なものが偏重される現代（マルタ）において欠落している何かが，イタリア＝マリオによって体現されていると考えられる。その計量できないものを指し示すことは，広く文学や映画に与えられた課題ではないだろうか。

口頭発表:文学 3

司会：寺尾 格，石田 雄一

1. 英雄譚における虚言の肯定性
― ジーフリトとトリスタンの比較を通じて ―

田中 一嘉

中世ドイツの叙事詩『ニーベルンゲンの歌』と『トリスタン』の主人公たる英雄ジーフリトとトリスタンが虚言を用いて冒険を達成する場面の分析を通じて，英雄的行動原理における虚言の意味合いを明らかにする。本発表でとりあげるのは，虚言の中でも「偽称」にあたるものである。ジーフリトは，クリエムヒルトへの求愛・奉仕の冒険の一環としてグンテルの求婚の旅に随伴するが，その際「グンテルの臣下」と身分を偽る。また，トリスタンは，モーロルトとの決闘で受けた傷を癒すため，「楽人タントリス」と称してモーロルトの妹王妃イゾルデの治療を受けに赴く。

『ニーベルンゲンの歌』においては，ジーフリトの「偽称」は英雄行為（冒険）の一環として肯定的に捉えられているが，初夜の秘密を吹聴していないという「偽証」はジーフリト自身の死を招いている。一方トリスタンの場合，タントリスと「偽称」していたことが暴露してしまうが，二人のイゾルデの欺かれたことに対する怒り・悲しみは，もうひとつの虚言にすりかえられる。このすり替えを可能にしたのが，内膳頭の「偽証」であり欺瞞である。内膳頭の虚言は，トリスタンによって白日のもとに暴かれ，なおかつ宮廷人としてもとる行為として断罪される。

以上のことから，虚言としての「偽称」には英雄的行為における肯定性を読み取れる。その一方で，卑怯者・虚飾者が行うような「偽証」は否定的に捉えられていることから，英雄譚においては虚言の肯定性および否定性に関する一定の倫理的な共通認識があったと言えるだろう。

2. 『エネアス物語』から『トリスタン』へ ― ミンネの可触性の問題について ―

渡邊 徳明

フェルデケの『エネアス物語』のミンネ（愛）は，しばしばクピドー（キューピット）の仕業として描かれる。その際，男女の間の恋の始まりは明瞭である。恋人達は自分らの間のミンネの発生を強く意識し，可視的に，肉体的に捉え，ミンネの苦しみを和らげる膏薬を欲しがりもする。それに対しゴットフリートの『トリスタン』では，最初ミンネは男女の心に内在化・内面化していて，本人たちですら，ある時期までその存在に気づかない。読みようによってミンネが存在するようにも，またしないようにも解釈できる。媚薬により初めて彼らのミンネは可視化される。しかし，媚薬の効能がどの程度なのかは依然として不明瞭である。

媚薬はミンネをゼロから生み出すのか，それとも潜在していたミンネを表面化させたに過ぎぬのか。本発表ではこの問題に関連しミンネの可触性について考察する。ミンネは物質的手段でコントロールできるのか，それとも物質性を超越した存在なのか，という問題である。前者の立場については，中世において香料・薬草などの媚薬が医術書などに記されている事実が想起される。後者の立場では，権力による弾圧や，肉体の破滅といった物質的悪条件にも負けない強く観念的なミンネ像が浮かんでくる。畢竟このようなミンネ像の分裂は物質性と観念性という古くからの二元論の伝統の上にあるのである。

3.　ノイバー座の演劇改革とザクセン喜劇の受容をめぐって

小林 英起子

本発表では 1730～50 年代のライプツィヒを主としたノイバー座の演劇改革の試みと，ザクセン喜劇の受容の実際について考察する。ゴットシェート派の文学サロンから生まれた諷刺類型喜劇は，教授，劇作家，官吏，学生等の知識階級の手によるものである。ゴットシェートの文芸理論『分別ある叱責する人達』(1725-26)に続く，喜劇に関する言説に注目し，『ドイツ戯曲集』を主に，いわゆるザクセン喜劇の特徴と生成の背景に言及したい。

ノイバー座主宰のカロリーネ・ノイバー(1697-1760)は本来，宮廷喜劇女優であり，喜劇俳優ヨーゼフ・F.・ミュラーの一座との競争から，ゴットシェートの演劇改革に協力していった。ノイバーと同時代人の交流や手紙については，レーデン･エスベック(1881)の研究書を援用する。ザクセン喜劇に関する先行研究では，K.ホル(1923)や W.ヒンク(1965)，南大路(2001)等が筋を紹介しているが，ノイバーの喜劇や受容についての研究はあまりなされていない。

ノイバー作『ドイツの序幕』(1734)では劇団の綱領的な台詞が目立つ。改革から離脱後の『羊飼いの祝祭あるいは秋の友人』(1753)は，道化役を使わぬ独特な牧人劇として成功している。1747 年～48 年のノイバー座では知識層に向けてフランス劇の上演が続き，ゴットシェート夫人やゲラートおよび自身の喜劇が時折上演された。当時のパンフレット，上記 2 篇の喜劇やレッシングと友人が交わした手紙等から，一座の活発な活動と挫折，ザクセン喜劇受容の実際を明らかにしたい。

4.　G.ハウプトマンを巡るブラームとラインハルトの相克

鈴木 将史

O.ブラームと M.ラインハルトが，20 世紀初頭，確執関係にあったことは周知の事実だが，ゲルハルト・ハウプトマン作品の上演権を巡るいざこざは，作家自身や知人も巻き込み複雑な様相を示している。本発表では，その様相を解明すると共に，彼らの対立とそれに続くブラームの急逝がハウプトマンの創作活動の変化，特に劇作中心から散文創作中心への変化や，ひいてはハウプトマン戯曲の質

的変化にまでも影響を及ぼしたのではないかと主張する。

ラインハルトとブラームの演劇観や演出方式の違いを比較検討する研究は，彼らの生存当時より盛んに行われてきた。ただ，両者の間には往復書簡めいたやりとりはほとんど存在せず，ベルリン演劇界で非常に近い立場にいた彼らの実際の関係は，第三者との交流により類推する他はない。そしてその第三者として最も参考となる人物の一人がハウプトマンである。当初はハウプトマン作品の上演を希望するラインハルトと上演権を持つブラームの間を仲介するべく苦労していたハウプトマンが，首を縦に振らないブラームに次第に憤りを覚える背景を検証することは，詩人の演劇観と彼の置かれた当時の状況を究明する一助となるであろう。盟友ブラームとの微妙な関係，そしてその結果もたらされた彼の創作態度の変化に，社会批判を伴う自然主義から耽美的な新ロマン主義へと転身を図り成功し，しかしながらその後半生にはヒット作に恵まれなかったハウプトマン文学の，新たな方向からの側面を探りたい。

ブース発表 3

携帯端末連携型教科書の作成と授業における運用について

川村 和宏，松崎 裕人，竹内 拓史，
熊谷 哲哉，押領司 史生

ドイツ語教育における E-ラーニングおよび IT 技術の活用については，まだ発展途上にあると考えられる。そこで，この分野の可能性を探ることを目的に，発表チームでは代表者が以前開発した「携帯電話用の初学者向けドイツ語学習ソフトウェア（FDKS）」を活用し，新たに携帯端末用ソフトウェアと連携した教科書を作成，運用している。

本発表では，この試みのために作成した教科書やソフトウェア，授業における実践例をブース発表の形式で紹介する。

まず今回の教科書作成の基本的な考え方を解説する。大学等における初修外国語の授業時間数の減少に伴い，知識の定着に必要な問題演習を授業中に十分に行うことが困難になったため，その不足をソフトウェアによって補うことが，この携帯端末連携型教科書の第一のテーマとなっている。

次に，実際の教科書内容について紹介する。教科書内容の工夫やソフトウェアと連携することで可能となった教科書の形式などについても言及する。

その上で，ソフトウェアと教科書の授業における活用方法について会場で実演しながら，教室における実践の様子を紹介する。

さらに，ソフトウェアの学習効果分析に関する経過を報告する。学生の協力により収集したデータを基に参加学生の使用状況などを紹介する。

最後に，今回得られた知見から外国語教育における携帯端末活用の今後の展望について言及する。なお，各発表者がそれぞれの担当する箇所を解説した後に，その都度質疑応答を行う。